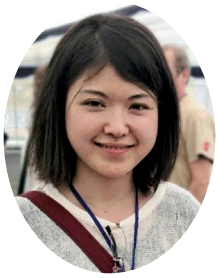
アカデミア メランコリア（第14回）（若手のコラム）

東京大学大気海洋研究所　日本学術振興会特別研究員 PD　高木 悠花



愛媛大の眞野さんからのご指名により、第14回の若手コラムを担当することになりました、東京大学大気海洋研究所の高木悠花と申します。私は昨年３月に早稲田大学で学位を取得し、現在東大大気海洋研究所でポスドク２年目に入りました。浮遊性有孔虫という動物プランクトンを軸に、他生物との関係(主に共生関係)、その環境による違い、物質循環における役割、さらに地質時代におよぶ時間スケールでの進化過程について興味をもって研究しています。本年度から学振特別研究員という身分になり、また新たな気持ちで研究をスタートさせたところです。

さて、ここでは学会発表の場での一期一会についてお話ししたいと思います。私のバックグラウンドは地質学なのですが、研究の場面場面でさまざまな分野と関わりを持ってきました。関係する学会には入会しておかねばという妙な意識から、その都度新たな学会へと足を踏み入れてきたこともあり、同世代の中では比較的多くの学会に所属しているかもしれません。入会した順に挙げますと、地質学会、古生物学会、JpGU、地球化学会、地球環境史学会、海洋学会、プランクトン学会となります。学生の身分ではなくなった今、学会の年会費がばかにならなくなってきた…ということはさておき、こうして眺めてみると自分の研究の変遷や拡がりがわかるようで面白くもあります。学会での発表も、今では国内外含めそれなりの回数を経験してきました。

学会発表、特に口頭発表をすると、思いがけない出会いがあるものです。現在の学振の受け入れ教員である齊藤宏明先生とも、海洋学会での発表に興味持っていただいたことをきっかけに知り合いました。その後の研究で関わることになる方々と知り合う糸口になったのも、そのときの発表であったように思います。この場限り、またとない機会と思って発表に臨むことは、それに費やした努力以上の可能性や、よい展開をもたらしてくれるようです。

国際学会の発表の場にも出会いやチャンスはいっぱいです。私の場合、発表をきっかけに共同研究の話をいただくことなどもありますが、いちばん大きな契機となったのは研究航海のお誘いをいただいたことです。チリで開催された国際学会での口頭発表後、それまで全く面識のなかったドイツの有孔虫研究者から、大西洋の研究航海に参加しないかと声をかけていただきました。もちろん私は二つ返事で承諾し、昨年には、その研究室に短期の在外研究に行く機会も持つことができました。そしてその航海はついに、今年の夏に実現します。この全てがたった一度の研究発表からはじまったかと思うと、非常に感慨深いものがあります。船上でもまた多くの研究者と出会うことができるでしょうし、一期一会、本当に大切にしていきたいものです。

最近では、ResearchGate のような、研究者間の SNS も盛んに利用されているようですが、学会という同じ場と空気を共有し、face to face で研究の話をするということは、よりリアルな関係を構築する絶好の機会であることは間違いないでしょう。これからの思いがけない出会いへの期待も込めて、魅力ある発表、魅力ある研究をしていけるよう、今後も努力していきたいと思います。発表がもたらしてくれたこれまでの出会いに感謝しつつ、最近では発表準備が直前ぎりぎりになってきた自分への戒めとして。